

論文

ソーシャルワーカーの専門的態度の養成への先駆的な試み

——『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』（1874）における「訪問員への一般的提案」から——

菊池留美[†]

要約：ソーシャルワーカーの専門的態度の重要性は指摘され続けている。ソーシャルワークの源流として慈善組織協会とセツルメント運動が挙げられるが、セツルメント運動は貧困者との人格的接触を重視して社会改良を目指したと評される一方、慈善組織協会は貧困者への道徳的教化を目的としていたと言及され、いずれにしても専門職的態度は要求されていなかったように整理されている。しかし慈善組織協会が訪問員向けに発行した『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』（1874）では、訪問員に対して、相手を尊重することとそれを言葉や態度で示すことが奨励され、自己決定の尊重、傾聴、秘密保持、訪問員の感情を統制した対応といった現在のソーシャルワークの面接技法に通じる態度も推奨されていたことが明らかになった。

キーワード：専門的態度、関係性、慈善組織協会、専門職化、専門職養成

目次

1. はじめに
2. 慈善組織協会とセツルメント運動における支援者の態度に関する言説
3. イギリスにおける慈善組織協会の設立とその背景
 - 3-1. 慈善組織協会の設立
 - 3-2. 中流階級の女性と慈善活動
 - 3-3. 女性の社会進出と専門職
 - 3-4. 小括
4. 『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』の概要と作成にあたっての関係者
 - 4-1. 概要
 - 4-2. 著者 C. B. P. ボーザンキット (Charles B. P. Bosanquet)
 - 4-3. 協力者 O. ヒル (Octavia Hill)
 - 4-4. 小括
5. 『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』における「訪問員への一般的提案」
 - 5-1. 「訪問員への一般的提案」の内容
 - 5-2. 内容の分析
6. おわりに

[†]同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

*2022年9月28日受付、査読審査を経て2023年2月9日掲載決定

1. はじめに

バイステック (Felix P. Biestek) は、ワーカーとクライアントの両者が形成する援助関係は、ケースワークの魂 (soul) であるとして重視した (Biestek 1957=2006: i)。彼は、援助関係はワーカーとクライアントの間に生まれる態度と情緒による相互作用によって構成され (Biestek 1957=2006: 19)、ワーカーは態度を通して自身の理解や反応をクライアントに伝えていくとした (Biestek 1957=2006: 24)。バイステックが提唱した援助関係を形成する7つの原則は、2019年度の社会福祉士及び精神保健福祉士養成課程のカリキュラム改正に伴って発行されたテキストブックにも取り上げられており⁽¹⁾、現在においても援助関係の重要性とそれを構成する要素の普遍性を示していることがわかる。

バートレット (Harriett M. Bartlett) は、ソーシャルワーク実践は価値、知識、および調整活動から成り立つとした。その中で、価値は人びとに対する態度に移しかえられるとされている (Bartlett 1970=1978: 141)。つまりソーシャルワークの価値は、クライアントへの態度として表出することとなる。

ワーカーとクライアントとの援助関係とワーカーの専門的態度の重要性はソーシャルワークにおいて自明のこととされ、現在も依然として強調されている。IFSW (国際ソーシャルワーカー連盟) が発表した「倫理原則のグローバルソーシャルワークステートメント」(2018)における原則は、「ソーシャルワーカーは態度、言葉、行動において、すべての人間の固有の尊厳と価値を認識し、尊重します」から始まっている。また、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」(2014)を基本に、先の「倫理原則のグローバルソーシャルワークステートメント」との整合性について検証した上で策定された日本ソーシャルワーカー連盟の「ソーシャルワーカーの倫理綱領」(2020)では、「クライアントに対する倫理責任」の一点目に、「(クライアントとの関係) ソーシャルワーカーは、クライアントとの専門的援助関係を最も大切にし、それを自己の利益のために利用しない」が挙げられている。

ソーシャルワーカー養成においては、これらを知識として伝えるだけでなく、支援に活用することができるように涵養していく必要がある。本稿では、これまでのソーシャルワークの歴史において、ソーシャルワーカーの態度はどのように着目されて養成されてきたのかを検証するために、ソーシャルワークの源流とされる慈善組織協会の訪問員に求められた態度を探る。

2. 慈善組織協会とセツルメント運動における 支援者の態度に関する言説

ソーシャルワークの源流は、一般的に19世紀末に誕生した慈善組織協会（Charity Organisation Society, 以下 COS とする）とセツルメント運動に求められる（伊藤 1996: 46）。まずこの二つの活動における支援者の態度はいかなるものかと言及されてきたのかを整理する。

COS は、産業革命後の社会問題に対して行われていた慈善事業を組織化することを目的として、1869年にロンドンで設立された。ここで行われた活動は、ケースワーク、コミュニティ・オーガニゼーションの先駆的实践だとされる（金子 2005: 57）。リーマー（Reamer 1999=2001: 10-1）は、19世紀末にソーシャルワークが専門職として出発した頃は、ソーシャルワークは専門職の道徳性や倫理よりもクライアントの道徳性に関心をもっていたとしている。COS による援助は友愛訪問による個人の道徳的教化を主眼としていた（木原 1998: 160, 金子 2005: 67）と評されることから、そのような認識が生じるであろう。

一方セツルメント運動では、知識人がスラム街に入って貧困者と生活を共にし、社会改良を探究した。ここで開発された方法は、グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーションの基礎となった（伊藤 1985: 47）。セツラー達は、貧困者と対等であろうとする平等主義を徹底し（木原 1998: 162）、貧困者との人格的接触を通じて貧困の現実からその科学的な理解をめざし、従来の慈善行為を脱却しようとした（金子 2005: 67）とされる。リーマーは、セツルメント活動の台頭によって、支援者の関心が貧困者の道徳性に関することから社会問題の改善へ移ったと指摘している（Reamer 1999=2001: 11）。

以上のように、COS では支援の対象となる人々の道徳性に着目してそれを強化することを目指していたが、セツルメント運動は貧困者との人格的接触を重視し、貧困の原因は個人ではなく社会経済的な欠陥から生まれたものと捉えて社会改良を目指したと指摘されてきた。いずれにしても、専門職的な態度が要求されていなかったように整理されている。しかし、COS において支援者と貧困者がどのような関係性であったかについては判然としない。ともすれば、支援者側は権威的な態度を取っていたかのような印象を与えている。

COS では、支援者としての態度に着目していたのであろうか。もし意識していたのであれば、支援者としてどのような態度で実践を行うことが目指されていたのであろうか。

3. イギリスにおける慈善組織協会の設立とその背景

3-1. 慈善組織協会の設立

19世紀のイギリスでは産業革命の進行により工業化が広がり、資本家が賃金労働者を雇用する資本主義的雇用関係が広がっていった。都市には急激に労働者が集中し、彼らは低賃金での長時間労働、不衛生なスラム街での生活を強いられ、疾病によって仕事と家を失うことも少なくなかった（川北 2020: 38-9）。

このような状況下で慈善事業が積極的に行われるようになったが、団体同士の連絡が不十分であったために慈善行為の重複や不正が生じていた。それに対して、慈善事業と救貧法との協力関係および慈善相互の協力関係をもたらすこと、全てのケースについて必要な調査を行い適切な対策を行うこと、浮浪者の抑圧を行うことを目的として、1869年にCOSが創設された（高野 1985: 186）。貧困は個人の努力、自助によって克服すべき問題と認識されていたことから、COSでは「慈善は、一時的に困窮しているケースで、善良な性格で節約の証拠のあるケースを援助すること」（高野 1985: 187）として、「救済に値する貧民」を援助対象とした。一方、不道德的要素（申し立ての偽り、悪習慣、浪費など）がある者は、何らかの処罰的・準処罰的処遇が必要であるとし、救貧法等に委ねた（高野 1985: 271）。

当時、自助、自立の観念を体現している／しようとしていることは尊敬に値する存在である、という意味の「リスペクタブル」という形容詞が、広く流通していた（山本 2018: 75）。上・中流階級の者たちは、労働者にも自助を根付かせようとした（山本 2018: 72）。「リスペクタブル」に値しない者への社会の目は厳しいものであったと思われる。

高野（1985: 267）によると、1871～75年にかけてCOSの地区委員会の一般的原則と基準が定められ、1874～78年頃には地区委員会活動におけるケースワーク的な要素（申請受理、面接、調査、訪問活動）が充実した。

3-2. 中流階級の女性と慈善活動

ここからCOSが設立された社会的背景について整理する。

松浦（2016: 20-2）によると、この時代のイギリスの社会構造は、上流階級、中流階級、労働者階級の3つの階級に区分される。上流階級は貴族・地主であり、全人口の2～3%を占める。中流階級は「召使を雇うことができるだけの経済力を持つ者」であり、医師、弁護士、軍の士官などの専門職である上層、工場経営者、卸売商、企業家、農場経営者などの中層、商店主などの下層に分けられる。中流階級までで人口の20%

強を占めた。それらに対して労働者階級は、労働（自分の時間）を雇用主に売ることによって賃金を得る者である。その中で、高い収入を得られる熟練工は上層に分類され、中層・下層は収入によって分かれるが、不安定雇用労働者は下層の労働者に入る。日雇い労働者は最下層に分類される。

また産業革命以降の階級分化と並行して、「男性＝公」「女性＝私」とする男女の領域分離が進展し、広く一般社会に浸透していた（渡邊・柴原 2013: 100）。

このような状況下で、中流階級は、経済力を得ることによって上流階級が担っていた社会的な機能も引き受けるようになり、慈善活動も行うようになった。中流階級の女性たちは「家庭の天使」の役割を果たすため働くことはなかった（働くべきではなかった）が、慈善活動への参加は奨励された（渡邊・柴原 2013: 101）。女性雑誌やパンフレットでも、慈善活動が推奨されていた（松浦 2020: 22）。女性のあるべき場所である家に立ち入る訪問活動は、女性の家庭外活動を抑制する当時の社会規範と折り合いがつかない、家の中のことは男性よりも女性の方が詳しいという利点をもつので、実情把握に優れていると考えられた（松浦 2008: 40）。さらに、男性よりも女性の方が貧困家庭で比較的抵抗なく受け入れられ、より同情的であったため、女性が行う方がよいと考えられていた（木内 1997: 87）。つまり、「活動の特質そのものに女性を有用ならしめ、活躍を促す要因が含まれていた」（松浦 2008: 40）のである。

一方で松浦は、中流階級の女性たちにとっての訪問活動の意味も考察している。「彼女たちの動機は多様であり、単純な説明ですませられるものではない」（松浦 2008: 43）としながらも、宗教的情熱から活動していた人がいた一方で、「日常への刺激を求めて、もしくはファッションの一種として人もするから自分も」（松浦 2008: 43）という人も多かったのではないかと推察している。「例えば華美な服装でのスラム街訪問といったような『勘違い』ぶり」が当時の雑誌に登場し、揶揄の対象となっていた（松浦 2008: 43）。

以上のように、階級格差と性別役割規範が明確であった時代に、中流階級の女性は「家庭の天使」として働くべきではない存在であったが、女性があるべき場所である家に立ち入る慈善活動への参加は奨励された。彼女たちの中には、宗教的動機をもって活動した者もいたが、当時の「ファッション」として参加した者も多かったと推察されている。そのような動機で活動する女性たちも含まれる訪問活動では、訪問活動の目的や意味、留意事項、必要な知識などを伝授する必要性があったと考えられる。

3-3. 女性の社会進出と専門職

3-3-(a) フェミニズム運動と専門職

一方、この性別役割規範が浸透していた19世紀半ばにおいて、自立・自活を求める

女性たちが出現した。つまりこの時代、中流階級の女性による中流階級の女性のためのフェミニズム運動が生じた（松浦 2020: 21）。この背景には、人口急増によって女性が男性よりも多いという男女比率の不均衡が生じていたこともあった（吉田・岡田 2000: 115）。彼女たちは、社会的に有用であることを意識して専門職に進出していった（松浦 2016: 25）。彼女たちが専門職の確立を希求したことが、この時代のフェミニズム運動の特徴の一つと考えられている（松浦 2020: 21）。

彼女たちはどのような専門職を目指していたのであろうか。吉田（1978: 23）は、19世紀後半の中流階級の女性の就業率において、教師、看護師、店員、事務職員、公務員の割合が急速に増加していると分析している。1911年の報告書によると、専門職7領域（教育専門職、医療専門職、看護師助産師、地方公務員&救貧委員会、国家公務員、事務職、女優）の中で女性が従事している割合が最も多いのが教育専門職であり、二番目は事務職、三番目は看護師助産師であった（松浦 2020: 23）。この状況に対して吉田・岡田（2000: 136-7）は、この時代のフェミニズムは、伝統的な家庭・子供・教会という生活領域の延長線上で女性の社会進出を要求する方針を採用したからこそ成功したのだと分析している。事務職は別としても、教師も看護師も、育児や病人のケアの延長線上に捉えることができ、保守的な女性らしさを生かすことが期待される職業だと言える。さらに、これまでサーヴァントや女工、ドレスメーカー、洗濯業従事者に従事していた労働者階級の女性の中にも、商業事務（タイピスト、速記者）や販売員に従事する者が出現した。その背景には、1870年に公教育制度が制定され、女子の識字能力が上昇してきたことがあった（松浦 2016: 26）。

3-3-(b) 看護師の専門職化

その中から、具体例として看護師の専門職化の過程を概観する。

19世紀半ばまでの看護は、家事使用人と同一視されるような、技術や熟練を必要としない労働であった。このような中でF. ナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820-1910）は、看護を専門職へと転換させた人物として知られている（渡邊・柴原 2013: 102）。

裕福な中流階級に生まれたF. ナイチンゲールは、教育を受けながらもそれを公的領域で活かすことが許されない現実への葛藤に苦しんでいた。その後、衛生や医療への具体的関心を高めた彼女は、文献を通して看護について学び、ドイツやフランスにおいて看護研修と観察を行った。その経験・調査・観察の結果、当時の宗教施設における女性看護師は専門職というより「熱心な宗教者」であることを指摘した。看護は「宗教的に中立であるべき」との見解を抱くように至り、看護専門職の基本的価値を考えるようになった（渡邊・柴原 2013: 102-4）。

1854年にはイギリス政府の公式派遣看護師団の統括者としてクリミア戦争の戦地に

赴き、看護職の実践的役割を提起した。帰国後の1860年には、一般向けの『看護覚え書 (Notes on Nursing)』を出版し、公衆衛生と患者へのケアの考えに基づく看護の原理を明示している。また同年、イギリス初の看護師養成学校として、聖トーマス病院内にナイチンゲール看護学校を設立した(渡邊・柴原 2013: 104-7)。

さらに看護の専門職化には、産業革命による都市化も影響している。当時のイギリスの都市では、劣悪な衛生環境のもとで多くの病害がたえず発生していた。これを改善するためには、行政による都市の構造的変換と、病害の撲滅に関わる医師・薬剤師・看護師等の専門職化が必要となったのである(加藤 2010: 182)。

以上のように、女性は「働くべきではない」とされていた社会状況の中で、「家事使用人」と同一視され宗教と不可分であった看護は、F. ナイチンゲールの功績によって専門職へと転換した。彼女によって、看護の価値とケア提供者像が提起され、看護師養成が開始されたことは、看護の専門職化を推進し、現在にも影響を与えている。『看護覚え書』は現代の多くの看護師にも看護のあり方とロールモデルを提供し続けており(渡邊・柴原 2013: 119)、ナイチンゲール看護学校は現在キングス・カレッジ・ロンドン(King's College London)の一部となって、看護、助産、緩和ケアの教育と研究を行っている。

3-3-(c) COS と専門職化

前述のように、COS はソーシャルワークの源流の一つとされるが(伊藤 1996: 46)、どのように専門職としてのソーシャルワークに繋がっていくのだろうか。

COS は発足後10年の実践を基に、1880年代は原理的、技術的に内容を固め、1890年代にはそれらがより精密化・技術化して、ボランティアの訓練に用いるようになった(高野 1985: 263)。この訓練のための講習会や会議では、COSの中央評議会の有力メンバーや地区委員会の経験豊富なワーカーが、ケースワークの経験の蓄積を整理して伝えた。そしてこの報告の多くは、書籍やパンフレットとして公表された。(高野 1985: 320)。組織的な教育が始まったと言える。

1903年には、評議員として一流の大学教授や社会改良家を、委員長として経済学者のアルフレッド・マーシャルを迎えて、社会学学校(School of Sociology)を開設した。そこでは、総合的方針のもとに、個人的指導によって行われる実習に重点を置いた理論と実践の結合をその基調としていた(Youngusband 1964=1979: 7)。学校における教育の開始である。

一方、ロンドンのCOSで活動していたガーティン(S. H. Gurteen)がアメリカ・バッファローにてCOSを発足したのを皮切りにアメリカにおけるCOSが発生し、その後各地に広がった(一番ヶ瀬 1963: 78)。その過程において従事者の数は増え、この従事者たちを訓練するために、1898年のニューヨーク慈善組織協会の夏季講習を発端に

各地で社会事業学校が生まれ増加していった。その訓練を契機に、ソーシャル・ケースワークは体系化され、客観化されて、一つの技術として成立した（一番ヶ瀬 1963: 177）。特に、リッチモンド（Mary E. Richmond）は『社会診断』を執筆することで、ワーカーの知識と方法を確認し、ソーシャルワークの専門的水準をさらに高めようとした（金子 2005: 60）。

このように、COS はボランティアを組織的に訓練するようになり、教育機関を設立するに至った。また COS は海を渡り、アメリカにおいてソーシャル・ケースワークの知識と方法の確立と教育の発展を生み出した。秋山（2007: 89）が社会福祉専門職が成立するために必要とされる要件として、「教育的要因」と「关系的要因」が共通していると整理していることから、COS の活動はソーシャルワークの専門職化に繋がるものと評価することができる。

その中で、COS は組織的な教育を始める以前の 1874 年に、訪問員向けの『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』を発行した。これは訪問活動の改善と統一を目標として作成されたもので、高野が概要を解説している（1985: 284-6）。また高野はその中の「訪問員への一般的提案」⁽²⁾が「貧困者の日常生活への影響力と、公私救済制度の利用に関する助言指導の重点や強調点が、どのようなものであったかを具体的に示している」（高野 1985: 286）と評価している。しかしその後は「訪問員への一般的提案」の要約の紹介となっており、内容について十分に考察されているとは言い難い。またその内容は、(1) 訪問員と相手方との人間関係における態度および配慮、(2) 相手方の日常生活状態の改善に関する助言、(3) 公私救済制度の適用に関する注意事項、の 3 つのカテゴリーに分類できるとしているが（高野 1985: 286-90）、「訪問員への一般的提案」の 33 項目と高野の分類との関連は明示されていない。伊藤（1996: 56）はこの高野の要約を参考にした上で、「当時の COS の貧困観にてらすと、むしろ意外な感じを起させる」と評している。これらから次章以降で、あらためて『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』の原書を参考にしながら、当時の COS の訪問員にはどのような態度が期待されていたのかを探ることとする。

3-4. 小括

19 世紀のイギリスでは産業革命の進行に伴い社会問題が深刻化し、慈善事業が積極的に行われるようになった。しかし団体同士の連絡が不十分であったために、慈善事業と救済法との協力関係および慈善相互の協力関係をもたらすこと、全てのケースについて必要な調査を行い適切な対策を行うこと、浮浪者の抑圧を行うことを目的として、1869 年に COS が創設された（高野 1985: 186）。貧困は自助によって克服すべき問題と認識していた COS は「救済に値する貧民」を援助対象とし、不道徳的要素がある者は

救貧法に委ねた。

この時代に「家庭の天使」として働くべきでないとされた中流階級の女性たちには、慈善事業への参加が奨励された。その中には当時の「ファッション」として参加した者も多かったと推察されており、彼女たちが慈善事業に参加する際の目的や意味、留意事項、必要な知識などを伝授する必要性があったと考えられる。

一方で、中流階級の女性の中には自立・自活を求めた者たちもあり、彼女たちは専門職の確立を目指した。COSにおいても、19世紀後半から組織的な教育が始まり20世紀に入って学校を設立していることから、COSの活動はソーシャルワークの専門職化に繋がったと捉えることができる。

COSは、組織的な教育を始める以前の1874年に、訪問員向けの『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』を発行した。この中に「訪問員への一般的提案」が記されており、ここから当時の訪問員にどのような態度が期待されていたのかを探ることとする。

4. 『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』の概要と作成にあたっての関係者

4-1. 概要

『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』（1874）は11章から成り立っている。序章に続いて、第2章は戸別訪問、第3章は訪問員への一般的提案、第4～6章は救貧法、第7章はロンドンの公衆衛生法、第8章はロンドンの学校局、第9章は都市部の慈善活動、第10章は学校と他の慈善活動、第11章は提供機関、質屋、貸し付け、労働者クラブ、移民と移住者、について記述されている。つまり序章から第3章では、訪問員の必要性や現状、訪問員への提案について記されていて、第4章以降では訪問員の活動上必要な救貧法や関係機関に関する具体的な説明がなされている。

この中から、ハンディブック作成の背景と目的が記されている序章をさらに見てみる。序章の最初には、大都市への人口集中によって善隣と社会的精神が失われる傾向にあること、このような状況においては異なった境遇にある人々の間に友情的なコミュニケーションを保つ方法が考えられるべきであり、それは可能な限り隣人との交流に似たものであるべきと述べられている（Bosanquet 1874: 3-4）。つまり、「訪問員は、教師としてよりもむしろ友人として向かうべきである」（Bosanquet 1874: 4）とある。また本書の目的については、活用できそうな一般的な情報を備えることと、各訪問員が教区との関連で確認する必要がある詳細について示すことが挙げられている（Bosanquet 1874: 8）。そして序章の最後には、「訪問員は、救済者もしくは教師として訪問するのか、第

三の道をとってまったくの友人として訪問するのかを定めるべきである」として、「もし最後の道が適合されて、直接的な分配や直接的な指示の義務から免れるのであれば、貧困者との交流はより自然で喜ばしいものになるであろう」(Bosanquet 1874: 9-10)としている。ここから、訪問員は友情的なコミュニケーションを取ることで、友人として接することが推奨されていたことがわかる。

4-2. 著者 C. B. P. ボーザンキット (Charles B. P. Bosanquet)

このハンディブックの著者は、1870年から75年までCOSの名誉書記(honorary secretary)であったC. B. P. ボーザンキット(Charles B. P. Bosanquet)である。

彼は短期間ではあるが訪問員の経験があり、また1819～24年のグラスゴー市セントジョン教区におけるチャルマーズの実験、1853年におけるプロシヤ、エルバーフェルト市の公的救済制度機構の実験、同時代におけるパリ市の公私救済機構の現状、1844年のニューヨーク市におけるA. I. C. P. (Association for Improving the Condition of the Poor)の活動、1859年のロンドンにおけるユダヤ人救貧委員会の組織機構について詳しい研究を行っていた。これらの諸経験から彼は、①無給の訪問員によるパーソナルな救済対象との接触と担当ケースの制限、②単なる救済よりも予防的処遇を重視する活動の原則、③訪問員の活動に対する監督の機構、を重視していた(高野1985: 148)。つまり、C. B. P. ボーザンキットは自身の経験と他国の実践の研究からCOSの教訓を見いだしており、その一つに訪問員と対象者との関係性への着目があったことがわかる。

4-3. 協力者 O. ヒル (Octavia Hill)

C. B. P. ボーザンキットは、ハンディブック作成の際に、O. ヒル (Octavia Hill)、A. H. ヒル (Alsager H. Hill) と他のCOSのメンバーから価値ある助けを受けたと記している(Bosanquet 1874: vi)。O. ヒルはCOSの設立当時のメンバーであり、COSの原則と方法に大きな影響を与えた人物である。

O. ヒルは、1864年から婦人ボランティアを活用して居住者と住まいの両方を改善するための住宅管理事業を実施していた。この実績が認められて、1869年にCOS中央評議会のメンバーとして迎えられる。彼女が担当したメリルボーン(Marylebone)は極貧地区であったが、住宅管理事業の経験を活かして多数のボランティアを育成して訪問活動を展開した(高野1985: 175)。

彼女は、公衆衛生問題の運動家であった祖父の影響で幼い頃から社会問題の存在を知り、女性のための共同ギルド(Ladies' Co-operative Guild)の管理をしていた母を手伝うことで、困窮する人々の生活実態に触れていた(成清2013: 83-4)。この頃から彼女は、貧しい子ども達を集団として見るのではなく、一人ひとりを独自の人格をもった存

在として捉えて付き合い (Bell 1971=2001: 28), 早くも 15 歳の時には見境なく施すという楽なやり方の持つ危険に気づいていたという (Bell 1971=2001: 28-30)。1864 年から開始した住宅管理事業では, 借家人との「全面的な相互尊敬」に基づく関係を理想とした (Bell 1971=2001: 101)。彼女は規則正しく, 週ごとに家賃を支払ってもらうというルールを徹底していたが, 細部へと気配りをし, 借家人が訴えた不満に対しては些細なことであっても対応し, 約束したことは必ず守った (Bell 1971=2001: 112-4)。事業が拡大するにつれて, 彼女は共に働くワーカーの養成にも取りかかった。そこでワーカーを希望する者が学ばなければならなかったのは, パートタイムであってもフルタイムであっても, 住民との付き合い, どのような状況の下で人々が生きているかを把握し, その状況を改善する方法を知ることだった (Bell 1971=2001: 141)。その後, 1893 年には女性大学セツルメント (the Women's University Settlement in London) の管理者と協力して, 女性ワーカー養成コースを設置した (出島 2015: 70)。

O. ヒルの住宅管理事業では, 借家人との関係を重視し, 「全面的な相互尊敬」を理想としていた。彼女の態度は道徳的専制的であったと批判されることがあるが (中島 1992: 51), 階級格差が明確であった時代にあつて, 関係性と相手を尊敬する態度を重んじていたのは注目すべき姿勢である。彼女は住宅管理事業とそれに伴うワーカー養成の経験を, COS においても生かしていった。

4-4. 小括

『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』(1874) は, 訪問員の必要性や現状, 訪問員への提案と, 救貧法や関係機関に関する実際的な知識について説明されており, 訪問員に対して「友人として向かうべき」ということが強調された。このハンディブックの著者の C. B. P. ボーザンキットは, 自らの経験と他国の実践研究を基に COS の教訓を見いだしており, その中には訪問員と対象者とのパーソナルな接触への着目が見られた。また COS の原則と方法に大きな影響を与えた O. ヒルは, このハンディブック作成にも協力していた。彼女が COS メンバーになる前から実施していた住宅管理事業では, 借家人との関係性を重視し, 「全面的な相互尊敬」を理想としていた。彼女はワーカー養成においてもこの姿勢を伝授した。

C. B. P. ボーザンキットや O. ヒルは, 自らの経験や実践研究から訪問員と貧困者の関係性を重視しており, その信念はハンディブックの中にも表れている。

5. 『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』 における「訪問員への一般的提案」

5-1. 「訪問員への一般的提案」の内容

『ロンドンの貧困者訪問員のためのハンディブック』における第3章の「訪問員への一般的提案」には、訪問員に望む具体的な行動が33項目にわたって記されている。本章では「訪問員への一般的提案」から、訪問員にはどのような態度、関係性の構築が期待され伝授しようとしてされていたのかを考察する。

前述のように、高野（1985: 286）はこの内容を、(1) 訪問員と相手方との人間関係における態度および配慮、(2) 相手方の日常生活状態の改善に関する助言、(3) 公私救済制度の適用に関する注意事項、の3つのカテゴリーに分類できるとしているが、各項目との関連性は明示されていない。また、(1) は「訪問員と相手方との人間関係における態度および配慮」とされているが、具体的な関わり方にまで言及している項目が見られたり、(3) は「公私救済制度の適用に関する注意事項」とあるが、訪問員としての業務内容自体を説明している項目も見られる。そこでカテゴリー名を(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方、(2) 貧困者への助言内容、(3) 訪問員としての業務内容、と変更して各項目を分類し、その内容を分析する。

表1 「訪問員への一般的提案」の各項目の要約とカテゴリー

	「訪問員への一般的提案」の要約	カテゴリー
1	最初の訪問では、心配している隣人の一人として友情的な言葉で自己紹介をすること。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
2	訪問の目的について、救済が必要かどうかを見に来たと言ってはならない。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
3	あなたが訪問する人々に対して常に尊重した態度でいること。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
4	あなたの訪問を受け入れない人々に対して訪問を強制しないこと、しかしその後相手が望んだ場合は再び訪問する用意があることを、友情的な方法で示すこと。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
5	騙される可能性があることを常に念頭に置くこと、しかし不必要に不信感を示して貧困者の感情を傷つけることは避けること。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
6	担当地区の家族への訪問を記録し、正確に登録すること。	(3) 訪問員としての業務内容
7	訪問中はメモを取らないこと。それは訪問を友情的でないものにする。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
8	彼ら自身が自分たちについて話したいことを、可能であれば関心をもって聴くこと。しかし他言しないこと。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
9	えこひいきに注意すること。完全に公明正大に行動していると彼らに感じさせること。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方

10	あらゆる提案において命令のようなものは避けること。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
11	個人的な清潔さの必要性や適切な換気の軽視を認めたときは、改善を穏やかにアドバイスする機会を得ること。	(2) 貧困者への助言内容
12	ゴミを除去するなど公衆衛生の権利と義務を知らせること。	(2) 貧困者への助言内容
13	料理法についての会話や家庭生活を快適にする提案を可能であればすること。	(2) 貧困者への助言内容
14	近隣の学校について情報を得て、訪問先の子どもたちを通わせるように励ますこと。	(2) 貧困者への助言内容
15	年長の子どもを働きに出し、最初に最も利益があるところよりも長い目で見て利点大きい職業を選ぶ重要性を主張すること。	(2) 貧困者への助言内容
16	節約の習慣を身につけるように促すこと。	(2) 貧困者への助言内容
17	貸本や雑誌を読むことを奨励すること。	(2) 貧困者への助言内容
18	物質的救済の責任を不必要に負わないこと。	(3) 訪問員としての業務内容
19	一種の救済役人と思われぬように用心すること。あなたが良く受け入れられた場合は、単にあなたが物を与えると期待されていたためにあなたの訪問が評価されていたのかもしれない。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
20	あなたの良心が認めない援助を得るための執拗さや一時的な同情の刺激に用心すること。	(1) 訪問員としての態度や心構え、具体的な関わり方
21	直接的にも間接的にも、怠惰、浪費、不法行為を戒めること。	(3) 訪問員としての業務内容
22	困窮している価値ある人々への最善の援助方法は、労働可能な人びとに職を見つけることを支援することである。しかし大部分の貧困者については、訪問者が仕事を見つけることよりも彼ら自身で見つけることの方がよい。	(3) 訪問員としての業務内容
23	病気があり教区の救済を受けていたり困窮している人は、一般的に教区の医師のサービスを受ける資格があり、申請することを勧めるべきである。	(3) 訪問員としての業務内容
24	病気の貧困者にとって、料理された食べ物はお金を二度渡すよりも良いサービスである。	(3) 訪問員としての業務内容
25	教区の救済を可能な限り避けること。	(3) 訪問員としての業務内容
26	救貧委員や教区役員に対する偏見から始めないこと。	(3) 訪問員としての業務内容
27	訪問者が救貧委員から厳しい処遇（例えば院外救済の却下）を受けていると考えられた場合は、当然、説明を受け公正な活動をしていたことがわかるように努力すべきであるが、同時に、院外救済は例外的な権利であり誰もがそれを要求する資格があるわけではないことを説明すべきである。	(3) 訪問員としての業務内容
28	ワークハウスを恐れている高齢者や虚弱者に対して、貧困が怠惰や悪徳の結果ではない者にとっては不名誉ではないことを知らせることによって、誤解を解くこと。	(3) 訪問員としての業務内容
29	他者を説得するためには、可能であればワークハウスを個人的に訪問することによって、ワークハウスが多く一般的な宿泊所よりも快適な住まいを提供してくれ、食事は良く、一定の医療があり、在院者は規則的に牧師や慈善活動を行うキリスト教の女性たちの訪問を受けていることを確信すること。	(3) 訪問員としての業務内容
30	教区の住人は彼らを時折訪問する努力をすべきであること。	(3) 訪問員としての業務内容
31	院外救済を受けている人で、自分のケアができないなどの理由でワークハウスの方が適切であろう人と会った場合は、救済委員に知らせるべきである。院外救済を受けている人で、過度な飲酒、物乞いや疑いなく好ましくない状態にある人に会った場合も、同様である。	(3) 訪問員としての業務内容

32	支援を行っている人びとからの感謝をいつも期待しないこと。	(1) 訪問員としての態度や心構え, 具体的な関わり方
33	貧困者に対するあなたの態度において, 短気や苛立ちを表さないように注意すること。特に支援の申請の面接の際には, 忍耐と丁寧さを判断と堅実さに結び付けるように努力すること。	(1) 訪問員としての態度や心構え, 具体的な関わり方

(Bosanquet (1874: 15-25) を基に筆者作成)

5-2. 内容の分析

先述の3つのカテゴリーに分類すると、「(1) 訪問員としての態度や心構え, 具体的な関わり方」に該当する項目がもっとも多く挙げられていた。特に, 相手を尊重することと, そのことを言葉や態度で示すことを奨励する項目が, 最初に多数挙げられている(1, 2, 3, 4, 7, 8, 9, 10)。当時, 労働者階級の人々の暮らしは上中流階級の人々に知られておらず, 上中流階級の人にとっては労働者階級の人々と知り合いになるというだけでもただならぬことだと認識されていた(出島 2015: 72)。しかしここでは、「貧困者」「労働者」という抽象的な存在ではなく, 相手を人として尊重し, それを示すことの重要性が指摘されている。ハンディブックの「訪問員は, 教師としてよりもむしろ友人として向かうべきである」(Bosanquet 1874: 4)という信念が貫かれている。具体的な関わり方としては, 自己決定の尊重(4), 傾聴(8), 秘密保持(8)といった現在のソーシャルワークの面接技法に通じる項目が見られる。また, 訪問員の感情を統制した対応が促されており(32, 33), バイステックの原則にある「統制された情緒的関与」に通じる専門職としての態度がすでに提示されていたと言える。一方で, 貧困者の態度に対して毅然として対応することを促す項目も見られる(5, 19, 20)。

「(2) 貧困者への助言内容」は, 日常生活に根ざした具体的なアドバイスとなっている。清潔さや換気の勧め(11, 12), 料理についての提案(13), 学校や子供の仕事, 読書の勧め(14, 15, 17)について述べられている。18世紀から19世紀にかけてのイギリスでは, ジェントルマンの生活様式が上層市民にも浸透していた。貧困者たちに, 「身体を清潔にし, 深酒を避け, こざっぱりとした衣服を身に付け, 家を整頓し, キッチンと料理をし, 子供の養育に注意を注ぎ, 街路では大声でわめか」(吉田・岡田 2000: 93)ない市民モラルを遵守させることが求められていた。当時の風潮がこの提言にも表れている。その際にも, 「穏やかにアドバイスする機会を得ること」(11), 「提案を可能であればすること」(13)と, 助言の仕方への配慮が見られる。

「(3) 訪問員としての業務内容」が記された項目からは, COSの原則や貧困観が浮かび上がる。貧困者が仕事を心得て自立することが最も良いことであり(22), 怠惰や過度な飲酒といった悪い行いや高齢者や虚弱者など働く見込みのない者はワークハウスへの入所が適切だとしていた(28, 31)。救貧法と慈善活動との協力関係を原則としてお

り、病気や高齢から貧困状態になる者の存在を認めながら、貧困の原因を個人の怠惰や不道徳さに見出す自由放任主義の思想がうかがえる。貧困の社会的要因への視点は見られない。

以上のように、訪問員へは相手を尊重することとそれを言葉や態度で示すことが奨励され、訪問員としての態度や心構えとして提案されていたことがわかった。また、自己決定の尊重、傾聴、秘密保持、訪問員の感情を統制した対応といった現在のソーシャルワークの面接技法に通じる態度も推奨されていた。

一方で、毛利（1990: 154）が、COSは「その貧困・慈善観からの当然の帰結として、クライアントの社会的『環境』調査を軽視し、『個人的性格』に大きく偏倚するという顕著な傾向を有した」と指摘したように、自助の重視や貧困の社会的要因の視点の欠如といった特徴も見られた。しかし、貧困の原因は個人的な欠陥や怠惰よりも社会経済的原因によるものの方が圧倒的に多いことが明らかになるのは、C. ブース（Charles Booth）のロンドン調査（1889-91）やラウンツリー（Benjamin S. Rowntree）のヨーク調査（1901）によってであるし（金子 2005: 88）、「慈善・博愛事業の用語が、社会（ソーシャル）を冠する社会事業に転換するのは、第一次大戦から」（吉田・岡田 2000: 122）であることから、それより以前の活動に「社会的要因への視点」を期待することは難しいだろう。

この「訪問員への一般的提案」は、“救済に値する貧民”を対象とした訪問員に向けたものという大きな制約があるものの、この時期にすでに、現在の専門職としての態度や姿勢、価値に通じる項目が提案され、支援者とその対象者との関係性を重視していたことがわかった。「労働者は、共同体社会の文明化された部分からは切り離された異人種同然に見なされていた」（Johnson 1985 = 1997: 189）時代にあって、自助を重視したCOSの活動においても、訪問者は相手を尊重すべきであり、それを態度や言動で示すべきことが提案されていたことは、注目に値することではないだろうか。

6. おわりに

COSはこれまで、貧困者を“救済に値する貧民”と“救済に値しない貧民”とに分類し、支援する側は貧困者の道徳性に着目して（Reamer 1999 = 2001: 10-1）、彼らの道徳的教化を主眼としていたと評されてきた（木原 1998: 160、金子 2005: 67）。この言説から支援者は権威的な態度で実践してきたかのような印象を受けるが、支援する側はどのような態度で実践を行うことが目指されていたのかはあまり言及されてこなかった。

1874年にCOSによって発行された訪問員向けのハンディブックから、訪問員へは相手を尊重することとそれを言葉や態度で示すこと、自己決定を尊重すること、傾聴、秘

密保持、訪問員の感情を統制した対応をすることが推奨されていたことがわかった。階級格差が明確な時代であり、自助を重視した COS において、“救済に値する貧民”を対象とする訪問員に向けたものという制約はあるものの、現在の専門職としての態度や姿勢、価値に通じる項目がすでに提案されていたことは注目に値する。

このハンディブックの作成には、自らの経験や実践研究から貧困者との関係性を重視していた著者の C. B. P. ボーザンキットや協力者の O. ヒルの影響があった。またハンディブックの作成の背景として、当時「ファッション」として慈善活動に参加していた中流階級の女性も存在していたことから、訪問活動の目的や意味、知識などを伝授する必要性があったこともある。一方で当時は、自立を目指す女性たちが専門職の確立を希求した時代でもあった。COS においても同様に組織的な教育が始まりソーシャルワーカーの専門職化に繋がっていったことから、このハンディブックはソーシャルワーカーの専門的態度の養成の先駆的な試みであり、ソーシャルワークの専門職化の前触れとも言えるのではないだろうか。

注

- (1) 添田正輝 (2021) 「ソーシャルワークにおける援助関係の形成」一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟『6 ソーシャルワークの理論と方法 [社会専門]』中央法規出版, P 93, 111-2) や稗田里香 (2022) 「ソーシャルワークと援助関係」岩崎晋也・白澤政和・和気純子監修『ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ』ミネルヴァ書房, P 55-60 に記載されている。
- (2) 高野は「訪問員への一般的提案」とも「訪問員への一般的助言」とも記している (1985: 286)。また伊藤は高野の本から引用して「訪問員への一般的助言」(1996: 359) としている。原文では「General Suggestions to Visitors」となっていることから、本稿では「訪問員への一般的提案」と表記することとする。

参考文献

- 秋山智久 (2007) 『社会福祉専門職の研究』ミネルヴァ書房。
- 一番ヶ瀬康子 (1963) 『アメリカ社会福祉発達史』光生館。
- 伊藤淑子 (1996) 『社会福祉職発達史研究－米英日三カ国比較による検討』ドメス出版。
- IFSW, *Global Social Work Statement of Ethical Principles*.
(<https://www.ifsw.org/global-social-work-statement-of-ethical-principles/>2022年9月28日アクセス)
- 加藤文子 (2010) 「イギリス産業革命と19世紀医療衛生政策－ナイチンゲールの業績への社会政策的評価－」『実践女子大学人間社会学部紀要』6, 177-197。
- 金子光一 (2005) 『社会福祉のあゆみ』有斐閣。
- 川北稔編 (2020) 『イギリス史 下』山川出版社。
- 木内泉 (1997) 「ビクトリア朝時代のイギリス女性による慈善活動と女性解放運動」『英米文化』27, 81-104。
- 木原活信 (1998) 『J. アダムズの社会福祉実践思想の研究』川島書店。
- King's College London, *Florence Nightingale Faculty of Nursing, Midwifery & Palliative Care*.
(<https://www.kcl.ac.uk/nmpc/about-us> 2022年9月28日アクセス)
- 添田正輝 (2021) 「ソーシャルワークにおける援助関係の形成」一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟『6 ソーシャルワークの理論と方法 [社会専門]』中央法規出版, 92-118。

- Johnson, Paul A. (1985) *Saving and Spending, The Working-class Economy in Britain 1870-1939*, Oxford University Press. (=1997, 真屋尚生訳『節約と浪費－イギリスにおける自助と互助の生活誌－』慶応義塾大学出版株式会社.)
- 高野史郎 (1985) 『イギリス近代社会事業の形成過程－ロンドン慈善組織協会の活動を中心として－』勁草書房.
- 中島明子 (1992) 「イギリスの地方自治体における住居管理」京都大学博士論文.
- 成清敦子 (2013) 「オクタヴィア・ヒル－居住環境改善のパイオニア－」室田保夫編『人物で読む西洋社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房, 83-89.
- 日本ソーシャルワーカー連盟「ソーシャルワーカーの倫理綱領」(<https://jfsw.org/code-of-ethics/2022> 年9月28日アクセス)
- 出島有紀子 (2015) 「オクタヴィア・ヒルの住居管理運動にみるボランティアと「友愛」の思想」『桜美林論考人文研究』6, 67-82.
- Bartlett, Harriett M. (1970) *The Common Base of Social Work Practice*, National Association of Social Workers. (=1978, 小松源助訳『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房.)
- Biestek, Felix P. (1957) *The case work relationship*, Loyola University Press. (=2006, 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳『ケースワークの原則 [新訳改訂版]－援助関係を形成する技法』誠信書房.)
- 稗田里香 (2022) 「ソーシャルワークと援助関係」岩崎晋也・白澤政和・和気純子監修『ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ』ミネルヴァ書房, 48-64.
- Bell, Moberley E. (1971) *Octavia Hill-A Biography*, Constable. (=2001, 平弘明・松本茂訳, 中島明子監修『英国住宅物語－ナショナルトラストの創始者 オクタヴィア・ヒル』日本経済新聞社.)
- Bosanquet, Charles B. P. (1874) *A Handy-Book for Visitors of the Poor in London*, Longmans, Green, and Company.
- 松浦京子 (2008) 「19世紀イギリスにおけるディストリクト・ヴィジティング－女性文化としてのホスピタリティ, 覚え書き－」『女性歴史文化研究所紀要』(京都橘大学) 16, 37-49.
- 松浦京子 (2016) 「ヴィクトリア・エドワード朝 イギリスの女性労働 (女性歴史文化研究所第24回シンポジウム報告「近代と働く女性たち」Ⅱ)」『女性歴史文化研究所紀要』(京都橘大学) 24, 19-28.
- 松浦京子 (2020) 「アマチュア・ヴォランティアからプロフェッションへ－前世紀転換期イギリスの女性福祉活動から社会進出を考える－(京都橘大学女性歴史文化研究所第二八回シンポジウム「近代ヨーロッパにおける女性社会進出－イギリスとフランスの事例から－」Ⅱ)」『女性歴史文化研究所紀要』(京都橘大学) 28, 15-32.
- 毛利健三 (1990) 『イギリス福祉国家の研究 社会保障発達の諸画期』東京大学出版会.
- 山本卓 (2018) 「リベラル・リフォーム再訪－20世紀への転換期イギリスにおける自助・互助・公助の再編－」『立教法学』98, 66-95.
- Younghusband, Eileen. (1964) *Social Work and Social Change*, George Allen & Unwin Ltd. (=1979, 一番ヶ瀬康子・窪田暁子・田端光美・松村祥子訳『社会福祉と社会変化』誠信書房.)
- 吉田久一・岡田英己子 (2000) 『社会福祉思想史入門』勁草書房.
- 吉田恵子 (1978) 「19世紀末イギリスにおける新中間層の出現と婦人労働」『明治大学短期大学紀要』24, 17-45.
- Reamer, Frederic G. (1999) *Social work values and ethics*, Columbia University Press. (=2001, 秋山智久監訳『ソーシャルワークの価値と倫理』中央法規.)
- 渡邊洋子・柴原真知子「イギリスにおける女性医療専門職の誕生と養成・支援活動－パイオニア女性のキャリア確立プロセスに関する成人教育的考察から－」『京都大学大学院教育学研究科紀要』59, 99-123.

Pioneering Attempt at the Training of Professional Attitude of Social Workers:
From “general suggestions to visitors” in “A Handy-book
for Visitors of the Poor in London” (1874)

Rumi Kikuchi

The importance of the professional attitude of social workers continues to be pointed out. The Charity Organization Society and the Settlement Movement are cited as the sources of social work, while the Settlement Movement has been described as aiming for social reform by emphasizing personal contact with the poor, the Charity Organisation Society has been mentioned as being aimed at moral indoctrination of the poor. In any case, it seems that a professional attitude was not required. However, in “A Handy-book for Visitors of the Poor in London” (1874), it was recommended to respect the poor and show it in words and attitudes, as well as adopt the attitudes that are common to current interviewing skills in social work, such as respect for self-determination, active listening, confidentiality, and controlled emotional involvement.

Key words: Professional attitude, Relationships, Charity Organisation Society, Professionalization, Professional training